

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：33912

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12383

研究課題名（和文）助数詞のカテゴリー化に関わる事物の「捉え方」の認知言語学的研究

研究課題名（英文）A Cognitive Linguistic Study of the Categorization System of Japanese Numeral Classifiers: Focusing on a Speaker's "Construal" of Counting Entities

研究代表者

濱野 寛子 (Hamano, Hiroko)

名古屋学院大学・経済学部・講師

研究者番号：50756971

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、助数詞「本」及び「本」と関連する助数詞について、コーパスの事例を用いて各助数詞と共起する動詞との意味的關係を、統計的手法によって分析した。各助数詞と親近性のある動詞の意味的特徴をそれぞれ特定し、これにより数える事物の捉え方について、動詞を通して把握する新たなアプローチを示すことができた。また、数える事物の捉え方に影響を与えると考えられている話者の職業や趣味等の経験について、助数詞の選択に反映されるかどうか容認度判定調査を行った。そして、数える事物に関わる話者の経験に基づいた知識量が、助数詞の選択に影響を与える可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来の助数詞研究において停滞していた助数詞の「捉え方」の問題を進展させることができたといえる。特に、主に分析者の判断を拠り所にしてきた従来の分析に対し、コーパスを用いた統計的分析や容認度調査といった定量的な分析を行ったことは、数える者の数える事物との（主体的な）相互作用が助数詞の選択に影響を与える可能性について、より妥当な知見を提供できたといえ、今後の助数詞の意味記述の精緻化にも貢献できるだろう。また、「捉え方」の問題を一般的な言葉の使用にも当てはめていけば、言語教育においてより効果的な指導法や教材の開発に役立てることができるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study focused on Japanese Numeral Classifiers (JNCs) "-hon" and the alternative JNCs for "-hon" such as "-mai", "-ko", "-hiki", and "-ken", and statistically analyzed the semantic relationship between these JNCs and the verbs that co-occur with each JNC using examples from a corpus. The analysis provided a new means of exploring how the entities are construed when they are counted using JNCs by identifying the semantic features of verbs that are closely related to each JNC.

In addition, I conducted an acceptability judgement task to investigate whether speakers' experiences based on their occupations and hobbies are reflected in the selection of JNCs (Inoue 1999). These results suggest that the amount of knowledge based on a speaker's experiences regarding an entity to be counted may influence the selection of JNCs.

研究分野：認知言語学

キーワード：助数詞 コーパス コレスポネンス分析 捉え方 カテゴリー化 容認度判定 経験に基づく知識量

## 1. 研究開始当初の背景

助数詞(例:「3本の鉛筆」の「本」)は、数える事物を独自の意味カテゴリーに分類する機能を持つ(例:「本」は“細長いもの”)。助数詞の意味カテゴリーは、有生・無生、形状といった数える事物の意味的特徴に基づいており、特に「人間/動物/無生物」という区分は助数詞の意味カテゴリーの分類基盤とされる。そして、例えば「\*3人の犬」が言えないように、この区分をまたいだ意味カテゴリーの助数詞はないとされる。こうした分類基準の一部は他言語の助数詞にもみられ、助数詞の意味カテゴリーは、人間の普遍的な外界認識の側面を反映していると考えられる。

一方で、助数詞には、1つの事物に対して複数の助数詞で数えることができるという使用上の特徴がある(例:「3{台/本}の電話」)。これについて、どの助数詞を用いるかは、数える事物のどの意味的側面を指して数えるかによるとされる(例:「電話」の場合「台」は“電話機”、「本」は“通話”を指す)。しかし、数える事物を表す名詞の多義的性質により、その意味的側面の判別や記述が容易でない。さらに、例えば「鮭を3本釣った」のように、上述の分類基準に適合しない助数詞の使用もみられ、このような使用は有生性、形状といった規範的属性のみでは記述しきれない。また、ある事物を数えるとき、なぜその助数詞を用いるか、すなわちなぜその助数詞の意味カテゴリーに分類されるのかは、単純に事物の意味的特徴から判断できるものではないといえる。

従来、助数詞の選択については、数える者の数える事物に対する「捉え方」が反映されていると指摘されてきた。特に、「助数詞には、数える話者の主観性が多分に反映されており、助数詞の複雑な用法は人間と環境の相互作用によってもたらされる」とする井上(1999)の議論から、助数詞による事物のカテゴリー化のプロセスには、様々な認知的要因が関わっているといえる。しかし、従来の研究では、例えば漁師や釣りを趣味とする人が釣った魚の数を数えたり、市場や水揚げの文脈で魚を数えたりする際に「本」が用いられる(飯田 2004)といった、個別の使用における「捉え方」の違いはいくつか指摘されているものの、それらの妥当性をはじめ捉え方に関する具体的な議論は進んでいない。助数詞の使用の側面を意味記述に適切に反映させるために、数える者の「捉え方」の問題を明らかにする必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究は、助数詞がどのような事物の「捉え方」に基づいて選択されるかについて、言葉の意味を言語使用者の主體的な解釈とみなす認知言語学の理論的枠組みに基づき、数える話者と数える事物との主體的相互作用の観点(井上 1999)から実証的に分析し、「捉え方」の問題の解明に繋げることを目的とする。具体的には以下の分析を行う。

- (1) 助数詞「本」及び「本」と関連する助数詞において、共起する動詞との意味的關係に注目し、動詞を介して数える事物がどのような捉え方をされているか探索する。
- (2) 職業や趣味などで特定の事物に関する経験量が多いと、その事物を数えるときの助数詞の選択にも影響を与えるか調査する。

## 3. 研究の方法

本研究では、助数詞「本」を中心とし、文脈によって「本」以外に選択可能な助数詞(「枚」「個」「匹」「件」)との間で、数える事物の「捉え方」がどのように異なるのかについて、以下の2つの分析を行った。

- (1) コーパスを用いた統計的分析:『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用いて助数詞「本」「枚」「個」「匹」「件」の事例を採取し、数えられている事物がどのような動詞と共起しているか特定した。そして、共起した動詞を『分類語彙表』に従って意味分類し、各助数詞がどのような意味の動詞と共起する傾向があるのか、コレスポネンス分析を行い網羅的に把握することを試みた。
- (2) 助数詞の容認度判定のウェブ調査:魚(「ブリ」「タイ」)の数え方を取り上げ、職業(漁業関係)や趣味(釣り等)で魚と接する機会が多い話者は、魚を数えるとき、生物を数える助数詞「匹」と、事物の形状的特徴に基づく助数詞「本」または「枚」の使用の容認度に、一般の話者と比べて違いがみられるかどうか、容認度判定調査をウェブアンケート形式で実施した。呈示文は動詞なし(例:3本のブリ)と動詞あり(例:3本のブリが泳いでいる)の2種類で、調査する動詞については、魚が生きている状態を表すもの(「泳いでいる」「網に入ってくる」と、水揚げされて生き物という認識が薄いもの(「競り落とされた」)の計3語を選定した。調査協力者については、ネットリサーチ会社を通して、職業や趣味等で魚と接する機会のあるモニター70名程度、それ以外のモニター120名程度に回答を依頼した。

## 4. 研究成果

- (1) コレスポネンス分析の結果、各助数詞において親近性のある動詞の意味カテゴリーは、

当該助数詞で数える事物の意味的特徴が比較的容易に想起できるものであった。例えば、「本」と近い関係に位置付けられた動詞の意味カテゴリーとして「成形・変形」(動詞の例:引く、伸ばす)や「上がり・下り」(動詞の例:立てる、上げる)があった。これは「本」で数えるモノが持つ、いわゆる「細長い」という形状に基づく意味的特徴と関連づけることができる。また、「見る」(動詞の例:(ドラマ等を)見る)という動詞の意味カテゴリーとも近い関係にあり、「本」の抽象的な事物を数える意味拡張的な用法と関連づけられる。「本」以外の助数詞については、「枚」は、例えば「合体・出会い・集合」の動詞の意味カテゴリー(動詞の例:合わせる、集める)と、「個」は「発生・復活」の動詞の意味カテゴリー(例:(実を)つける)などと近い関係にあり、これらも、各助数詞が用いられる事物の形状に基づく意味的特徴との関連が見出せる。また、「匹」は「連れ・導き・追い」(動詞の例:(犬を)連れる)の動詞の意味カテゴリーと、「件」は「行為・活動」(動詞の例:(協力を)行う)といった動詞の意味カテゴリーと特に近い関係にあり、同様に各助数詞で数えられる事物の意味的特徴と関連したものであるといえる。

本分析において、各助数詞にそれぞれ近い関係として位置づけられた動詞の意味カテゴリーは、他の助数詞にとっては親近性が見られないと判断できることから、その助数詞に特有のものであるとみなせる。よって、本分析結果は、事物の捉え方に基づく助数詞の意味記述を目指す上で、他の助数詞との捉え方の違いを明らかにするための手がかりにもなるといえる。

また、助数詞の意味分析においては、基本的に数える名詞の意味的特徴を分析するが、文脈における助数詞の選択の違いを分析し意味記述に反映させるには、名詞に注目しただけでは限界がある。これに対し、本分析は、文脈を決める重要な要素の1つである動詞に注目し、動詞の意味カテゴリーから各助数詞において特有の意味的特徴を判別した。本分析のアプローチは、そうした文脈による助数詞の選択の違いや数える事物の捉え方を探る上で有効だといえるだろう。

(2) 容認度判定の結果、仕事や趣味で魚とより関わりのある話者の方が、数える対象(魚)の形状的特徴に基づく助数詞「本」や「枚」を用いた数え方の容認度が比較的高い傾向がみられた。特に「3本のブリ」「7枚のタイ」といった文脈なしの呈示文でも、一般の話者と比べると容認度が高かった。このことから、魚とより関わりのある話者の方が、魚に対して形状的特徴に注目する捉え方を有している可能性が考えられる。よって、本調査は、話者の職業や趣味が事物の数え方に影響を与えるという従来の指摘について、妥当性を高める結果であったといえる。

話者の職業や趣味が助数詞の選択に与える影響については、濱野(2022)の調査で、SNS関連の語(例「コメント」「ツイート」)を数えるときの助数詞の選択に、話者のSNSをめぐる活動経験量が影響する可能性が示されたことから、本調査結果も、数える事物に関する経験に基づいた話者の知識量の違いが、その事物を数えるときの助数詞の選択に影響を与えている可能性を示すものといえる。なお、本調査では、協力者に数え方の容認度の判定をしてもらった他、魚に関わる仕事や趣味の従事期間も尋ねており、それらの関係については研究期間内に明らかにすることができなかつたため、今後分析を進め、成果を発表していくことを予定している。

以上のように、本研究では、助数詞の事物の「捉え方」の問題を具体化し、コーパスを用いた分析や容認度判定調査の定量的な分析から、新たな知見を得ることができた。また、これらの分析を通して、助数詞の使用の実態をより明らかにしたことも、実際の使用に即した助数詞の意味記述を目指す上で重要な成果であるといえる。今後も、分析対象の助数詞を増やしてコーパスの分析を進めていき、事物の「捉え方」の解明につなげるとともに、助数詞の意味記述の精緻化を目指したい。

#### 〈引用文献〉

飯田朝子(2004)『数え方の辞典』小学館。

井上京子(1999)「助数詞は何のためにあるのか」『月刊言語』28(10), pp. 30-37.

濱野寛子(2022)「助数詞の選択における話者自身の活動経験の関与について—SNS関連の語の数え方に注目して」『日本認知言語学会論文集』22, pp. 415-420.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 濱野寛子
2. 発表標題 助数詞の使用における動詞との意味的関連について
3. 学会等名 CASTEL/J 2023
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------